



TITLE:

<學界展望> 最近一年の東洋史學界

AUTHOR(S):

宮川, 尚志

CITATION:

宮川, 尚志. <學界展望> 最近一年の東洋史學界. 東洋史研究 1948, 10(2): 121-126

ISSUE DATE:

1948-05-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/138875>

RIGHT:

學界展望

最近一年の東洋史學界

宮川 尚志

編輯者からの依頼で本誌新一巻五・六號の波多野君の學界展望のあとをうけて大體昭和廿一年八月から執筆してゐる現在（廿二年九月末）までの東洋史學界の動向を素描しようと思ふが、終戦後第一年目に比しこの一年間に東洋史關係の單行本の新刊は數倍に上りそれだけでも通讀はおろか一見だに難かしく、また氣の附かぬ場合も多々あるべく、以下の叙述はまことに物足らぬもので各種の學術雜誌及び特に綜合雜誌登載の論文に至つては會々筆者の偶然目にふれたものに限られるおそれがあることを先づ御斷りしておく。とにかく量的に多くの東洋史學の成果が社會に提示されたことは喜ぶべきであるに違ひないが、單行本の中には多く學者の舊來の論文を合せて再録したり書下しの形式を取つても學說思想内容は新味のないものも見受けられるのと、過去數年の出版事情の爲當然早く刊行さるべく漸く昨今社會に送り出されたため、研究の展開を求めてやまぬ著者である限り、今日の立場や心境は今日出版の機を得た書物中の學說と、離れぬ迄も時節外れになつてはゐないかと思はれ

るのもあるなどの事情で、質的に見て額面通り東洋史學の新展開とか隆盛だと言へるかどうか。それから經濟事情を反映して單行本に比し専門的な學術雜誌の刊行が困難で不振であることは新進學徒の發表の機會を少くしてゐる。最近の東方史論叢（養徳社）の刊行や支那學一二ノ五の終刊號につづく東光の發足、東洋學報の復刊はその渴をいやすに足るとはいへ傳統の樹影こく創造の芽伸びがたい傾向はしばらくつづくかも知れぬ。又研究機關研究者の事情について言へば最近の日本讀書新聞の報ずる如く東洋文庫・東方文化學院・靜嘉堂文庫など研究機關の戦時にうけた障害、これにつづくインフレーションの打撃による諸般のなやみ多い實情は悲しむべきである。従つて研究者の生活上の問題が着實な研究をはばめてゐることも認めねばならぬ。終戦後の一年に比し、二年目では出版界の外見では立直りが明かに見られるが著作の實情をしらべると、ここにもストツクのくひつぶしと思はれる面もある。固り個々の業績については優れた研究があり過去の研究の集積を要約し將來の發展の先河をなすも

の絶無ではない。昨秋京都の學界からあひつぎ出た宮崎市定氏「科擧」(10秋田屋)貝塚茂樹氏「中國古代史學の發展」(12弘文堂)は正にこの双壁で前者はその對象の重要性からこれまで何人かにより概觀的著述が試みらるべかりしものが漸くにして出た待望の書であり、後者は増淵龍夫氏「現代中國史學界における古史研究の問題傾向」(一橋論叢一七ノ三四)に紹介批判された中國學界のそれを越えた大成果といふべく、從來破壊に急にして再建の途なかつた中國古代史の分野が現在唯一といふべき研究者により堂々と世に問はれたものである。京大東洋史學の淵源たる湖南内藤博士の講義案が弘文堂から「中國近世史」「中國中古の文化」として刊行され、後者を収める教養文庫からは岡崎文夫・佐々久兩氏の「支那の政治と民族の歴史」・小竹文夫氏「支那の自然と文化」が出て、これらは最近刊の東方學術協會編「中國史學入門」上卷(高桐書院)と共に新しく斯學を修める人の入門書としても適當である。(書名の下のアラビア數字は9・12は昭和二十一年1・8は二十二年を略した發行月を示す)

同じく京都の關係學界から村田治郎氏「建築文化の交流——中國篇(5高桐)・神田喜一郎氏「典籍割記」(弘文堂)能田忠亮・藪内清兩氏「漢書律曆志の研究」(東方文化研究報告十九冊・6全國書房)狩野直喜氏「讀書叢餘」(7弘文堂)長尾雅人氏「蒙古喇嘛廟記」(3高桐)長廣敏雄氏「大同石佛藝術論」(11高桐)

等あひつぎ出で盛んなりといふべきである。小林太市郎氏の「禪月大師の生涯と藝術」(3創元社)「漢唐古俗と明器土偶」(4一條書房)の二大著も中世文化研究の大きな寄與である。

この外、單行本の數も多いが、次に雜誌論文の傾向につき若干きづいたことをのべよう。學界の動向の尖端がほのみえるのは主にかかるものからである。

第一に東洋の現實の新展開に即し東洋史學の新出發再建設を計らうといふ意圖が見られる。その爲に東洋史學上の根本問題を取上げ過去の研究を批判すること、久しく耳目にふれなかつた諸外國の學界の近況を知らんとすること、東洋史の世界史的立場からの批判の類がなされた。歴史學研究一二五號に報ぜられる所によればその東洋史部會において三上次男氏が「中國史の時代區分についての一考察——特に宋に就いて」と題する講演をなし種々な異見が出たといひ、野原四郎氏「東洋史の新しい立場」(21・6中國評論)では十八世紀まで中國・インドネシア・インド・西アジア等は各自の道を歩み共通の利害に結ばれ統一體をなさなかつたが、然し農村共同体遺制や治水事業の重要性による共通性格により東洋の歴史概念は過去にても成立すると主張した。東洋非存在論を唱へた津田左右吉氏は「シナの史といふもの」(歴研一二二)の中で中國人に民族としての生活なく群衆としての生活しかなかつたと中國の王朝史學を批判しつつ結論された。例により甚だ説得力を持った書き方である

が本論文に關する限り實證的でない。藤間生大氏「東洋の國家」(歴史評論一ノ三)には日本と中國との古代國家を比較し家内奴隸制を基礎とする點共通であるが日本では村落が政治的に中央と結びつき領主制武士階級が内部に於て發展し自力による古代社會の克服が成されたと云ひ、中山治一氏の學海誌上の三部作の一「アジアと非アジア」では岡倉天心の「アジアは一なり」の論を紹介しそれは蒙古征服以前において佛教による文化統一體を成した印度・日本・中國・朝鮮のみを指し、モロコは非アジアとして第三の世界を考へたと論じ氏獨自のユーラシア史論を示す。これらは國史や西洋史家のアジアに對する關心を示すものであるが、専門の東洋史家の見解や批判はまだ見られない。季刊大學二號に、幼方直吉氏「古代的なものとアジア的なもの」小倉正平氏遺稿「古代中國社會における治水事業と灌漑の意義」の二文あり、一はウィットフオーゲルの近著遼代史(中國研究所報二に野原氏紹介あり)の見解にふれ、一は同氏の舊説を批判する。外國の學界展望として石田幹之助氏「米國に於ける中國研究」(世界文化6・7)の外に、ロシアについては岡本三郎氏「ソヴェート・レンボーにおけるアジア研究」(歴研一二二)「翳伯贊氏に聽く中國歴史學界の動向」(中國資料22・6)あり、岡本氏の「アジア的生產様式論」(潮流22・7)もこれに屬する。

第二に東洋史上の各部門の根本問題に關した論說の發表が夫

々の専門家により行はれてゐる。哲學者の中で久松眞一氏「東洋的無の性格」(哲學季刊一ノ三)武内義範氏「佛陀の出道」(同二ノ一)あり、中國哲學史家からは木村英一氏「中國民衆思想の源流」(人文科學一ノ三)重澤俊郎氏「經學の本質」(哲學研究三一ノ一)「支那思想と過去の日本」(日本史研究四)中國思想の進歩性と停滯性(思想276)平岡武夫氏「天下の世界觀と宗教」(哲學季刊一ノ三)あり、京都の中國哲學科の諸峰の夫々異なる特色ある立場を示し、中國史の究明を助けるものがある。その他「中國の科學」その歴史的展望(小宮義孝氏、思想274)「アジア的宗教について」(鈴木俊郎氏、潮流二ノ六)等々、「東洋的社會と人間類型」(飯塚浩二氏、世界評論8)何れも狹義の東洋史専門家以外の方面から東洋史を專攻する際に無視し回避したりできぬ主題を或ひは高所より或ひは深く鋭く取り上げたもので、吾等としては史學的考證により理論の根柢をなす事實の知識を擴大すると共に、自らもかかる見解と對決し批判すべき綜觀的考察に熟し最も具體的な學問は歴史の外にないことを明かにすべきである。かういふのは史學者個々の研究において考證の段階が不必要になるといふのではなく、否むし理論諸科學の方法や見方法則を史實解釋の時否定的媒介として發見的原理とすることにより史料關連の背後にある事實關連を光透らぬ限もなく照し出すことを意味する。事々において一切の理を見るので實證的な學問は理論科學の兵器倉庫でもなければ補助

的任務をもつものでもない。

第三の傾向として、第二を精神科學との協同とすればこれは自然科學との提携により、技術史科學史的分野が開かれてきたことがある。東方學術協會機關誌たる學海（學藝）には今西錦司氏「草原にのこしてきた問題」（9・動物の急速な蕃殖が牧野を汚染し移動を起させ従つて遊牧民が移動するといふ假説の提示）吉良龍夫氏「米の魅力——東洋の農業と西洋の農業の比較生態學」（3）などこの意味から興味ある指摘があり、本誌の將來性ありみのり多き傾向の一に數へられよう。西嶋定生氏「碾磑の彼方——華北農業生産力展開史上の一問題」（歴研一二五）には六朝の水碓（垂直運動）を利用し脱穀精白に向くが製粉は困難）は華北麥作の漸増により唐代の水平運動利用の碾磑に代られた。後者は一時稻作の爲の灌漑水利と競合し政府の禁壓をうけたが、唐中期以後、國家自身の莊園經營、租庸調法から兩稅法への移行と共に方針がかはつたと論じ、技術史的課題の彼方に出て社會經濟史の本道に入つてゐる。經濟史が政治史社會史と結び付く前に技術史に裏づけられる必要は今後の問題である。中國經濟史の開拓者加藤博士の遺稿「支那に於ける稻作特にその品種の發達に就いて」（東洋學報三一ノ一）を見ると、この方向が既に示されてゐるのを感じる。

第四に大陸において實地調査に當り豊富な資料を集めた人達が幸ひ保存された資料を本にして新鮮な報告をなしてゐること

である。安達生恒氏「長城地帯の農業とカソリック」人文科學一ノ三）直江廣治氏「華北村落の傳承運搬者」（中國評論一）等これに屬する。

第五に新進學徒による近世經濟史關係の論文が若干ある。かつて唐宋が經濟史の中心對象であつたが今では元明に焦點が移つたらしい。前田直典氏「元朝時代に於ける紙幣の價值變動」（歴研一二六）は嚴密な史料研究の上に立つた氏の元代史研究の數種の勞作中の近作であり、藍宮谷英夫氏「近世中國における賦役改革一二」（歴史評論一ノ二、三）も一定の見透しの下に詳密な考證を施してゐる。

第六に終戦後中日關係の再出發を意圖し學術文化上の提携を計るため中國資料・中日文化・新中國・大同・桃源などの雜誌が在日中國人有志の首唱の下に發刊された。中日文化創刊號には飯島幡司、能田忠亮、小島昌太郎、吉川幸次郎、藏内清、鹿地亘など各方面の學者評論家が寄稿し一見まともりはないが新鮮な暖かい學問的ふんいきをかもしたしてゐる。これに呼應する如き役割に立つのに平野義太郎氏を所長とする中國研究所があり、現代中國の實相を科學的に研究しその民主化に學ぶことを目的とし、政治經濟部と社會文化部に分れ、京都等にも支部をおき、月刊中國評論・中國研究所報を刊行し、若々しい活動を示してゐる。在來の中國學東洋史に對する建設的批判をこの方面から望むこと切である。

以上は最近の諸傾向の中やや著しいものを皮相的に取り上げた。特にこの傾向の眞中に在るわけでないが東洋史全體の發達の爲に寄與すべき論著でまだ記さなかつたものを時代順にあげよう。

古代については津田左右吉氏の「論語と孔子の思想」(岩波書店)板野長八氏「荀子の禮節——儒教成立の前提として」(歴史研一二八)森鹿三氏「竹と中國古代文化」(東光二)あり、大島利一氏に「汜勝之書について」(東方學報一五ノ三)あり氏の中國古代農業技術研究の一部をなすものであらう。貝塚氏はその大著の後にも「龜卜と筮」(東方學報一五ノ四)「不朽」(學海四ノ一)「孔子と子産」(東光二)其他のさい利なる論考をもつてある。久野昇一氏「易緯に見えたる軌に就いて」(東洋學報三一ノ一)新美寛氏「初猷六羽について」(支那學十二ノ五)を讀み、戦争が奪つた學問の芽をいたましく思ふ。村川堅太郎氏により「エリュクトゥラー海案内記」(生活社11)が譯註されたことは喜ばしい。

中世に入ると時期はやや古いが日野開三郎氏の扶餘國考(史淵三四)勿吉考(同三五)新進の岡崎精郎氏に「唐代に於ける黨項の發展」(東方史論叢一)の長篇あり、日唐令の課役の解釋を廻る仁井田・曾我部二氏論争の余波である曾我部氏の「日唐令に見ゆる孝子順孫の條文について」(史學雜誌五六ノ七)がある。佛教思想史では津田左右吉氏の「智顗の法華懺法について」

(東洋學報三一ノ一)ある外、中國佛教史専門家の作品發表少きはいかが。しかし外に石田幹之助氏の講演要旨「突厥に於ける佛教」(史學雜誌五六ノ十)、宮崎市定氏に「清談」(史林三一ノ一)津田氏「唐詩における花酒」と(と東洋史會紀要五)あり、中世史のゆたかな研究分野が思想史にあることを告げる。

近世に入ると、今堀誠二氏「宋代常平倉研究」上下(史學雜誌五六ノ十一)田村實造氏「遼宋交通資料註稿」(東方史論叢一)吉川幸次郎氏「元雜劇の用語」(東方學報京都一五ノ三)藤井宏氏「明代の田土統計に關する一考察」(三完)(東洋學報三一ノ一)がある。清代に入ると、村松祐治氏「奴兒哈赤の女眞國とその部族的秩序の交渉」(一橋論叢一七ノ三・四)宮崎市定氏「清朝における國語問題の一面」(東方史論叢一)安部健夫氏「清朝と華夷思想」(人文科學一ノ三)鈴木正氏、「清初兩淮鹽商に關する一考察」(史淵三五)羽田明氏「露清關係の特殊性」上下(學海三ノ九)がある。太平天國に關しては拙稿「初期太平天國の宗教性」(人文科學一ノ三)波多野善大氏「太平天國の女性」(學海四ノ二)の外、當時の上海史の活寫として外山軍治氏「太平天國と上海」(4高桐書院)の著述がある。清朝史の綜合的著述としては東洋史家としては全くの新人、佐野學氏の「清朝社會史」あり、三部八輯の企畫であるが、第一部の「國家と社會」は未刊で、第二部第三輯の「豪紳、奴隸と賤民商人」第三部農民暴動の全部、即ち第一輯「清代民亂の本質並に發展、白

蓮敦の亂」第二輯「海寇・捻・拳匪」第三輯「太平天國革命」が出てゐる。原史料にも相當ひろく検討を加へ、唯物史觀の公式を脱した自由な立場に立ち、靜態的ではあるが一舉に清朝社會の全般を組織的に敘述せんとする努力には評價さるべきものがある。現代史に近づく程、所謂専門東洋史家以外の學者の活動が廣くなり、丁度古代中世の思想史藝術史などが哲學や美術専門家にまかされ東洋史家の中から政治經濟的方面と精神文化とを有機的に關連させ體系ある把握をなす人が少いのと同様の事情を示す。出口勇藏氏に「孫文の經濟思想」(12 高桐) 島恭彦氏「中國輿地の技術と勞動」(11 高桐) 福武直氏「中國農村社會の構造」(10、大雅堂) 等はその例である。新中國八、九、十二には京口元吉氏の江戸時代から昭和に至る日本の大陸政策の研究がある。近代滿洲史關係には三上次男氏「十七世紀以降に於ける漢人の滿洲移住に就て」(1 國民の歴史) 岸本英太郎氏「滿洲に於ける近代資本」労働力形成史序説(歴研一二四號)があり、近代史の關心が依然として盛んなことを示す。

この粗雑な展望を書いてゐる間にも續々と新刊の論著が出てをり、各分野の連絡も有機的になり異つた立場や對象をもつ學徒同士にも相互の理解がなされゆくであらうことが期待される。

岡崎 精郎

「後唐の明宗と舊習」(上) 正誤表

頁數 行 誤

正

51 13 上 應明

應州

56 5 下 ②⑤

②⑤

56 8 上 ②⑤

②④

56 12 下 ②⑦

②⑥

58 12 下 中國右今[△]

中國古今[○]

58 17 上 自重贊

自重贊

61 14 上 より始るがノ下へ(遼史卷七)ヲ入レル
(十國圖表)